

芸術に目醒めた野菜たち。



研ぎ澄まされた刃が
 多くりとよぎってゆく。
 そのたび、紅い花びらがこぼれ落ちる。
 指先が、わずかな角度を刃に与える。
 透きとおるほど薄く削がれたそれは、
 花弁となつて、
 掌の肌色をかすかに映した。



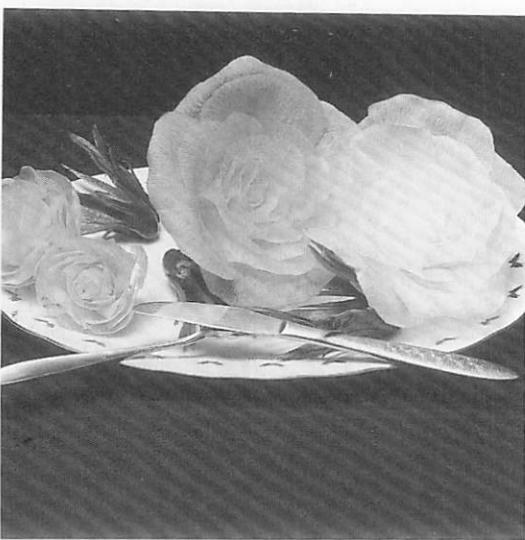
研ぎ澄まされた包丁が一本の野菜をゆつくりとよさる。そのたびに、紅い花びらがこぼれ落ちる。包丁をもつ指先が、わずかな角度を刃に与える。と、花びらの色も微妙に変化する。透きとおるほど薄く削がれたそれは、朱の花弁となつて掌の肌色を幽かに映す。

そうしてつくりだされた数々の花弁をつめた水に浸してゆく。すると空気中ではみられなかった、珊瑚にも似た光を帯びはじめ。なんと、野菜は金時に戻ってしまった。さらに時間を経て、細い指が器用にそれらの花びらを綴ってゆく。わずか二〇秒ほどの間に、一輪の薔薇が指先に咲いた。

VEGETABLE ARTIST

SHINGO FUKUNAGA

福永新吾



物を粗末にするな。おもちゃにしたらもつたいない」と叱られる程度の出来栄であった。だが、それがかえって心を奮い立たせることになる。せめて周囲の者が黙ってみてるだけのものはつくってみせよう。負けず嫌いの性格が、包丁を握る手をさらに励ませた。

やがて高校入学。その頃になると、氏の「作品」をみた両親は何もいわなくなつた。それどころか、褒め言葉さえ口端にのぼるようになった。高校卒業後は家業を継ぐために各地で板前修業に明け暮れた。そのかたわら、野菜の花に賭ける包丁さばきはますます磨かれていった。技術的なことにも関心したが、野菜を通して見た花の造形の奥深さに夢中だつた。

「幼い頃から花を眺めるのが好きだつた。うまく言えないけれど、花には心を表現する何かがあると思つた」街角の生花店はもとより、周囲のあらゆる花が研究の対象となつた。植物園にも通つた。見るだけではなく、花を手に取り、時には分解して花びらの数や形状を観察した。最後には顕微鏡をのぞいて複雑な模様や微細な線の走行まで見極めた。

「野菜の繊維を活かして薄く切れ目を入れていく。そうしていちばんいい部分をあらわにする。その部分を薄く削るとうねりをもつたうすい一片がでてくる。花びらと同じうねりをもっているそのひとひらつつを組み合わせると、それが一輪の花になるんです」

かつては、いかに本物に似せてゆか考え続けた。そのためにさまざまに努力も積んだ。今は、形を真似ることよりも、生命を表現することに腐心する日々だといふ。目線が花から手元の野菜に戻つた、といつてもいい。生きている素材の息吹を、いかに花開かせることができるのか。近ごろは絵画や銅版画を製作しながら、そのことを考える日も多くなつた。

「もつともつとベジタブルアートを世の中に広めたい。僕自身の作品を多くの人にみてもらいたいし、多くの人々から刺激を受けたい」

単なる物珍しさから脱皮、作家として未知なる領域に挑みつつ彼の目に、大輪の花がすぐそばで燃えている。



文／三村 溪
写真／日本ベジタブルアート協会提供

「ごく簡単に爪楊枝で根元を止めるだけで出来上がったその薔薇は、ほんものよりも瑞々しく盛感的だ。それは、花というより華と呼ぶのがふさわしい。驚かされたのは、その花を半日ほどそのままにして枯れゆくさまを眺めたときだった。もはや横にほんものを並べてみても、それが野菜と知らなければ手に取つてさても区別はつかない。花芯の香りをたしかめてみれば、微かに匂いを感じることもできる。偶然の妙とはいえず、不思議な体験だつた。

練達の包丁さばきは、あらゆる野菜を花と化す。ラベンダーや蘭のように透明で繊細な花も、向日葵や牡丹のよう

に肉厚な花も思いのままだった。世界で唯一のベジタブル・アーティストと呼ばれる福永新吾氏は、意外なことに三十一歳の青年だつた。八年前、二十三歳の時から世に認められた氏は、衛星放送で世界に紹介され、これまでも数々のマスコミに取り上げられた。新聞雑誌はもちろん、各局のテレビ番組も彼を歓迎し、その技術に称賛の声を惜しまない。首相官邸のパーティーで、何度かその花を飾りつけたこともある氏は、自ら日本ベジタブルアート協会を設立。現在、五千人あまりの会員参加を得てこれも好調だ。

もちろん野菜で花をつくるのは、福

永氏をはじめたことではない。ヨーロッパ、アメリカ、中国などで似たようなものを見た人は多いはずだ。だが、究極の写実性と本物を越える美をもつて野菜を素材とした花づくりに挑んだのは、なんと氏が少なくとも公認された人物としてはじめてだつたのである。

滋賀県野洲町に生まれた福永氏は、家業の日本料理店を手伝いはじめた中学一年生のころから、この花づくりに手を染めていた。料理に添えて飾られた野菜をみては、「もつともつと本物そっくりにつくりたいのだから」と思いついたのがきっかけだといふ。さっそく取りかかってみたが、最初は両親から「食べ

PROFILE
昭和三十八年生まれ。滋賀県野洲町出身。世界で唯一のベジタブルアーティストとして二十三歳でデビュー。一九八七年、日本ベジタブルアート協会を設立。テレビ、雑誌、新聞、イベントパーティーなど多方面のマスメディアに登場をつづけた。内閣総理大臣官邸調理パーティー部門など各界で活躍する。「野菜の芸術 水と花の世界」や「食べる芸術」など個展活動も積極的に展開。一九九〇年にはベジタブルアート写真集・「夢の花」を出版した。また、大五産業より権田氏との提携をへて近々京都にベジタブルアートの新しい拠点を置く計画を進行中。京都駅周辺など、京都市内二箇所で新たな活動を開始する。